

スイスの謎：5

5/5——グラウビュンデン:健全な生活の州

クリストフ・ケブラー

参照 | 本誌pp.3-7

19世紀を通して、グラウビュンデン州の諸地域では、大勢を占める農業に対して観光業とセラピー産業が肩を並べ、大きく成長を遂げた。ダボス、サンモリツ、アローザといった拠点都市はこうして大きな発展を果たした。統いて、第二次世界大戦後にスキーパー人気が上昇すると、フリムス=ラア、クロスター、サヴォニン、レンツアーハイデ、ディゼンティスなどが新たな観光地に加わった。当時、こうした発展を可能にした重要な条件を最もよく表していたのは、州内の道路網および鉄道の接続である。1889年頃、レーティッシュ鉄道がダボスに延伸し、1903年にはエンガディーンまで、1914年にはアローザまで伸びた。全体が山岳地帯であるグラウビュンデン州では鉄道と同様に道路建設が求められた。ロベール・プラール、クリスティアン・メン、ユルク・コンツエット、ヴァルター・ビーラーなどの工学校技術者たちは、より低速の交通手段(すなわち歩道やサイクリング・ロード)も含め卓越した工事を実現した。

[I]

1860年にコンラッド・マイヤー=アーレンスの『スイスの湯治場と保養地』が出版された。同書には医療や療養の施設について、スイスの気候について、特にサンモリツとダボスという近代建築のヴァキヤブリリーの発展に興味深い役割を果たした2つの都市についての詳細な情報が書かれている。サンモリツに関しては、サンモリツ温泉

泉の泉質の高さが強調される一方、ダボスは気候が特筆される。マイヤー=アーレンスは結核に罹患した子供特にダボスを勧めているが、受け入れ施設の不足のため、あまり活用されていない[注1]。アローザに関しては、本書では触れられてもいない。実際、アローザが保養地として著しい発展を遂げるのは19世紀末になってからのことだ。

マイヤー=アーレンスの詳細な記述は、スイス高地地方の急激な工業化の文脈に位置づけられる。工業化の結果、低所得者層の住民にとって都市の居住条件が悪化した。そのため、衛生保健状態の向上が医学者、建築家、都市計画者の仕事の最優先事項となるのに時間はかからなかった。また注目が集まつた山岳部の保養地も、それぞれの解決策を模索し始めた。こうした省察の頂点をなすのが、近代建築の代弁者のひとりであるジークフリート・ギーディオンが1929年に公刊した、『解放された住まい、光、大気、開口部』という綱領的なタイトルを冠した著作である[注2]。ギーディオンはこの本の何章かをまさにダボス・フラウエンキルヒで執筆し、特にダボスのサンナトリウム(結核療養所)を近代建築の先駆として取り上げ、将来の住宅のプロトタイプと評価した。

マイヤー=アーレンスの言葉は無視されなかつた。すでに1873年にダボスは市内のサンナトリウムを「ダボス、結核患者にとっての新たなメッカ」と宣伝した。1932年に近代性のしるとして、スローガンが「ダボス、高山にある太陽の町」に変わつた[注3]。ロッジアがあり陸屋根で南向きの、近代的で機能的なサンナトリウムの後を、すぐさま学校、スポーツ施設、住宅が追いかけた。1926年に「プロ・ユ

ウェントゥーテ(青少年のために)」サンナトリウムの院長だった医師ジャン・ルイ・ブルクハルトは、新しい療養建築の教えに従つて自邸を改築させた[注4]。1930年頃には、近代建築は治癒を約束する治療施設と見なされると同時に、病気の予防手段として捉えられた。この頃、アローザでも近代建築はまずサンナトリウムという先駆的領域で評価され、その後でホテルや住宅——特に医師たちの自邸——に現れた[注5]。

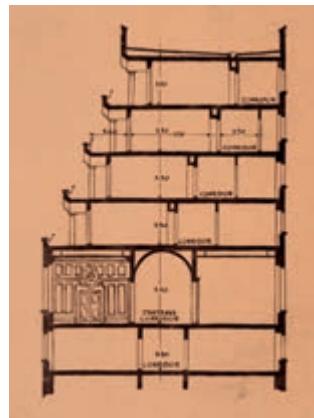
一方、サンモリツでは、結核への関心が懐疑論を上回つた。きっかけとなつたのは、1898年に医師P・R・ベリーが同地の温泉の質について書いた『療養地としてのサンモリツの未来』と題する小冊子である[注6]。ベリーは増える一方の患者の存在によって温泉地の将来が脅かされていると考えたのだ。彼は血清療法を用いた結核治療が間もなく可能となり、将来的に肺病患者たちは回復期治療のためにのみ保養地に滞在するようになるだろうと述べた。「そうなつたらアルプスにある牡蠣養殖場をどうすればいいのか? その時は、短期的視野の投機家たちはわれわれに回答する義務がある!」[注7]。もし肺病患者までいなくなつたら、何が起きてしまうのだろう? そこでサンモリツはもっぱら温泉地として評価されていく。1898年に市議会はサンナトリウム建設反対を表明した。曰く、サンモリツは何よりも冬季スポーツを愛好する健康な人々と回復期患者のための滞在地である[注8]。それゆえ、裕福な観光客にふさわしいホテル施設を整備しなければならない。

サンモリツが肺病患者の療養地としての発展を止めたとしても、建築史のうえで「Terrassentyp(テラス型)」と呼ばれるようになるサンナトリウムの類型が生まれたのは、まさにこの地なのだ。骨関節結核の治療法を研究するため、医師のオスカー・ベルンハルトは自分の患者に直射日光を浴びさせ、良い結果を出した。この治療を最も効果的に適用するため、彼はテラス付きのサンナトリウムを考案した。段状の構造によってバルコニーが上階の陰になるのを防ぐものだ。

いずれにせよ、このタイプの建物はサンモリツで大量に建設されることはなかつた。その結果、この町は機能主義の色濃いサンナトリウムに特徴づけられた療養地としては発展しなかつた。反対に、近代建築がよしとされた領域は、スポーツ施設建設に限られていた。事実、1928年の冬季オリンピックを見据え、1927年から1928年に



ジャン・ルイ・ブルクハルト邸、1926



オスカー・ベルンハルトによるサンナトリウム計画、1914

無断での本書の一部または全体の複写・複製・転載を禁じます。
copyright© 2007-2016 Arnoldo Mondadori Editore
copyright© 2007-2016 Architects studio Japan

[フェラの学校建築、1994-97]

設計:ペアルス & デプラゼス・アルキテクテン(ヴァレンティン・ペアルス、アンドレア・デプラゼス、ダニエル・ラドナー)

設計マネージャー:Adrian Christen

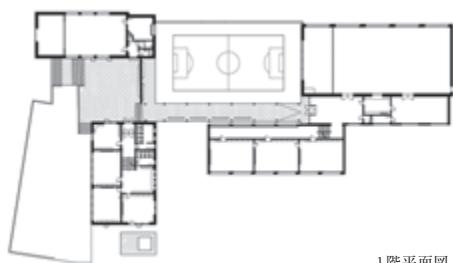
構造:Casanova + Blumenthal AG; Ilanz / Cavigelli und Partner, Ilanz

エネルギー計画:Andrea Ruedi, Coira

施工:Werner Caduff SA, Cumbel / Tannò SA, Vella / Savoldelli SA, Vella

建築主:フェラ町 | 所在地:Vella, Kanton Graubünden, Switzerland

参照:本誌pp.14-15



1階平面図



冬景色



フェラ町を望む



多目的室

[セヴガインのタワーハウス、1998-99]

設計:ペアルス & デプラゼス・アルキテクテン(ヴァレンティン・ペアルス、アンドレア・デプラゼス、ダニエル・ラドナー)

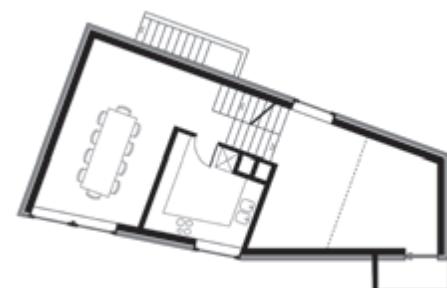
設計マネージャー:Bettina Werner / Tamara Bonzi

構造:Jürg Buchli, Haldenstein | 木構造:Holzbaubüro Reusser GmbH, Winterthur

建築主:Theres e Urban Willimann-Lötscher

所在地:Sevgein, Kanton Graubünden, Switzerland

参照:本誌pp.16-17



1階平面図



遠景



外観



内部

無断での本書の一部または全体の複写・複製・転載を禁じます。

copyright© 2007-2016 Arnoldo Mondadori Editore

copyright© 2007-2016 Architects studio Japan

「ルゴのオーディトリアム」

設計=パレデス+ペドローサ・アルキテクツ

本質のエコノミー エミリオ・トゥノン

参照 | 本誌pp.26-45

スペインの建築設計事務所の中で、パレデス+ペドローサ・アルキテクツ（アンヘラ・ガルシア・デ・パレデスとイグナシオ・ガルシア・ペドローサ）は信頼性、専門家的能力、一貫性において突出している。疲れ知らずの働き者であるパレデスとペドローサは建築家としての活動と、おもにマドリード建築大学で行っている教育者、批評家、研究者としての活動を両立し、同大において彼らは学生と教師陣にとって信頼できる参考ポイントとなっている。これらマドリードの建築家たちによるたゆみのない地味な仕事は、モダニティと伝統とのバランスのとれた弁証法的関係を源泉とするものだ。さらに、ラファエル・モネオ、ファン・ナバロ・バルデヴェクといった他の重要なスペイン人建築家の動きとつながり、とりわけ、1957年にマドリードの大学都市に建てた素晴らしいコレジオ・マイヨール・アキナスから建築家キャリアを始めたホセ・マリア・ガルシア・デ・パレデスの仕事と直結している。ホセ・マリア・ガルシア・デ・パレデスの教えはアンヘラ・ガルシア・デ・パレデスとイグナシオ・ガルシア・ペドローサの職能形成にとって本質的なものだった。1982年にマドリード建築大学を卒業した2人が働き始めたのはまさにホセ・マリアの建築事務所であり、1990年にホセ・マリアが早すぎる死を迎えるまで同所に留まつたのだ。

その当時、アンヘラとイグナシオは重要な舞台芸術系

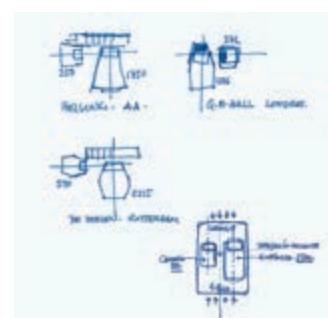


街路側より見る

の建築設計に携わるチャンスを得た。中でも特筆すべきは、1986年に火事で焼失したグラナダのマヌエル・デ・ファリヤ・オーディトリアムの再建計画（1974-78）、マドリードの国立音楽オーディトリアム（1988）、バレンシアのパラウ・デ・ラ・ムシカ（1987）、ムルシアの国際会議場とオーディトリアム（1995）である。ガルシア・デ・パレデスの傍で最初に経験を積んだこととその後に展開する仕事のおかげで、マドリードの建築家2人は今やスペインで最も高く評価される、音楽のための建築の専門家になった。

ホセ・マリア・ガルシア・デ・パレデスが1980年に描いた小さなスケッチが、師の作品を論じたアンヘラ・パレデスの博士論文に収録されている。このスケッチはアクセス路と設備エリアの観点から同じ建物内に並列する2つの空間を併合する問題を検討したものだ。引用されているのは、例えばヘルマン・クラーイファンヘルの作品「デ・ドーレン」（1966）、グレーター・ロンドン・カウンシル建設局長のヒューバート・ベネットがロンドンに建てた「クイーン・エリザベス・ホール」（1967）、ヘルシンキにあるアルヴァ・アアルトの「フィンランディア・ホール」（1971）である。この小さなスケッチで検討された建物のうち2つが、2015年にイグナシオ・ガルシア・ペドローサが論じた博士論文「オーディトリアム、20世紀の一建築タイプ」にも組み込まれたことを指摘するのは興味深い。

デ・ドーレンとフィンランディア・ホールはガルシア・デ・パレデスにとって非常に大切で親しみ深い建物だった。筆者の見解では、いずれもパレデス+ペドローサ事務所によってルゴのオーディトリアムを設計する際の参考モデルとして巧みに活用された。しかしながら、マドリードの建築家たちが設計したオーディトリアムにもっとも近い有機的スキームを示すのは、間違いないアルヴァ・アアルトの作品の



ホセ・マリア・ガルシア・デ・パレデス:
劇場のスタディ、1980



ホセ・マリア・ガルシア・デ・パレデス:
マヌエル・デ・ファリヤ・オーディトリアム、1978



アルヴァ・アアルト:
フィンランディア・ホール、1971

「フランツエンフェステ城砦の西棟改修」

設計=マルクス・シュエラー

ある古城の博物館とレセプション・センター

マルコ・ムラツツァーニ

参照 | 本誌pp.90-101

フランツエンフェステは1833年から1838年にかけて建設された、ハプスブルク支配期の要塞化した巨大ダムで、ブレンナー峠に近いイザルコ渓谷の最も幅が狭い地点のひとつにある。当時最大の軍事技師のひとり——フランツ・フォン・ショル、[ルイ14世に仕えたフランスの技術将校セバステียน・ブレストルド・ヴォーバンに因み]「オーストリアのヴォーバン」と通称された——によって設計された大規模施設は、約20ヘクタールに広がり、フォルテ・バッソ、フォルテ・メディオ、フォルテ・アルトに3分割されている。完成から数十年のうちに、ヨーロッパの戦略計画が変化して城砦は副次的な役割に後退し、倉庫と弾薬庫としての利用が決まった。1918年にイタリア国家が買い上げ、軍隊が利用することになる。兵営の廃止を受けて2003年にボルツァーノ自治県に所有権が移った。2006年に告示された設計競技に続いて、修改築のマスター・プラン作成がマルクス・シュエラーとヴァルター・ディートルに委ねられた。2007-09年の第1期工事は、展示やシンポジウム活動に使われていたフォルテ・バッソとフォルテ・メディオのエリアが対象となった(『CASABELLA』783号、2009)。城砦を構成する最初の「インフラストラクチャー」への最も重要な工

事は、2つの城砦間を水平と垂直に連結する新たな通路の円環を閉じる必要性に応えたものだ。砲台を人工の池のほうにつなぐ2本の橋を積み重ねた解は、特に大胆に映る(12mスパンのスチール構造で、タイロッドによって連結され、キャンティレバーで湖の上に突き出ている)。これに劣らず重要なのが、フォルテ・メディオに連絡する新たな垂直トンネルを実現したことだ。爆薬を使って岩盤をくり抜いた地下道には、エレベーター1基と鉄筋コンクリート造の階段が通された。階段は、連結されているが断続的な隔壁で構成され、螺旋状に展開する。来訪者はこの通路に沿って、金色の手すりを頼りに進む(マンフレード・アロイス・マイールのインスタレーション作品で、1943年12月にイタリア銀行に預けられた黄金がこの城砦に運び込まれた出来事を想起させる)。

完了して間もない第2期工事では、いわゆるC棟——城砦の西端——の修改築が行われ、展示スペース、展望台、ブレンナー基地トンネルの建設を請け負う「BBT SE」公社の事務室が置かれた。城砦のこの部分は、1970年代にSS12号線の地下トンネル工事によって深刻な損傷を受けていた。実際、その工事中に、C棟を構成する3つの建物のひとつ——旧兵舎——がほぼ完全に崩壊し、トンネルの上部に相当する部分に深い裂け目を残した。その傷口は今回の建築的介入によって塞がれた。すなわち、上の中庭の高さに、消えた建物の輪郭に沿って、つまり道路を架橋するようにデザインされた建物——多機能ホール——が新築された。それより下の中間階の高さでは、道路の北東に位置する岩のくぼみに鉄筋コンクリートのヴォリュームが造られ、ブレンナー基

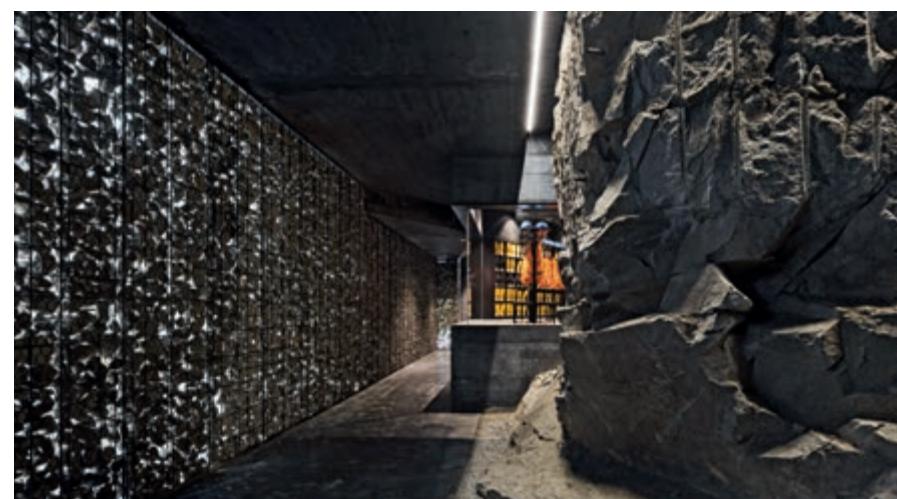


全体配置図

地トンネル工事の視察団のための洗面所と更衣室が置かれた。C棟へはフォルテ・バッソの中庭からアクセスする。そこから、近くにある2ヶ所のエントランスからそれぞれ上の庭(+6.5m)と中間階(+0.5m)に行ける。上の中庭に向かうアクセスは、城砦の分厚い壁の中に通された階段を上っていく。中間階に向かうアクセスは、SS12号線に隣接した1本の通路に沿って進み、突如現れる岩のペール——花崗岩の破片を金網で覆っている——を避けてさらに3.5m地下にもぐって進む。そこから外の光が射し込む。更衣室のある高さに階段とエレベーターが設けられ、上層と連絡する。新築ヴォリュームの北端に相当するこの地点で、建物が古い城砦の花崗岩でできた力強い壁体と接する。新しいヴォリュームは、中庭が2つあるC棟本来の空間分節を再び作り出すとともに、通路の結節点となるこの空間によって中庭を連結する。同様に、新ヴォリュームによってSS12号線上の裂け目が完全に閉じられたわけではなく、屋外の中庭と内部の中庭にひとつずつある2つの「井戸」を介して見えるまま残された。多機能ホールは鉄筋コンクリート造の箱で構成され



高速道路が貫通する西棟(C棟)



フォルテ・バッソからC棟・中間階への通路

CASABELLA JAPAN

レビュー



クレスゲ・オーディトリアム



TWAターミナル：内部

には明るい展望をも示すような、さらに掘り下げた論究内容が示唆されているとも言えよう。

TWAターミナルの成功は短命ではあったが、実に目覚ましいものだった。リンリはその理由を、1954年以降にサーリネンの2番目の妻であるアーリーン・B・ローチハイムが、夫であるエーロに纏わせた「伝説性」をさらに強化しようと果たした役割に光をあてて解説している。リンリはまた、夫妻のパーソナリティーの諸手を挙げて賞賛しきれない側面についても長々と触れながら、アーリーン・B・ローチハイムが夫の成功欲を刺激し、満たすために、その才能と剛毅さを発揮したのは間違いないと論じている。サーリネンが抱いた成功への渴望の源を語るのは、容易いことではない。ことによると、彼が人々から「文化に貢献する建築家」としてだけでなく「文化人」として見なされたい、という願望を打ち明けたとされる精神分析医であれば、探りあてることができるのかもしれない。サーリネンが医師

にそう告白したことを考慮に入れるなら、夫の欲望の背景にあるトラウマに感づいていたアーリーン・B・ローチハイムが、1954年以降、それを利用して、夫の人物像を高めようと効果的な作戦を粘り強く繰り広げてきたのは、精神分析学的な見立てにまったく関心のない人間にとっても想像に難くないだろう。実際、アーリーンは、結婚する1年前に『ニューヨーク・タイムズ』誌上でエーロにインタビューを行っている。記事のタイトルは「Now Saarinen the Son (さあ次は、息子の方のサーリネンの番だ)」であった。それは、彼女が、エーロのトラウマが、父親でありまさに「文化人」であったエリエルとの関係に端を発していることを理解していたからだろうか？

本書でも言及されているサーリネンが彼の精神分析医に宛てた手紙については、ドナルド・アルブレヒト[ニューヨーク市を拠点に活躍するデザイン・キュレーター]も、[フィンランド、ノルウェー、ベルギー、アメリカを巡回した]展覧会カタログ『Eero Saarinen: Shaping the Future』(イェール大学出版局、2006)に収録された論文「The Clients and Their Architect」の中で引き合いに出している。アルブレヒトは、リンリ同様に、サーリネンの全キャリア(と、前述したとおりのサーリネン事務所の活動の多産性)は、大物クライアントたちと関係を築くことができたがために為しめたものだという事実を前面に打ち出している。「サーリネンのクライアント陣は、紛れもなく、戦後のアメリカを決定づけた最も著名な業界・機関の、いわば紳士録にも等しいような顔ぶれだった」。アルブレヒトはそう記すとともに、サーリネンが、現代美術や彫刻が「漂流」しているのは「作家らが、伝統的なクライアントだった大実業家を失った」せいだと見なしていた点に改めて着目している。一方、リンリは、サーリネンが大物クライアントとの間に良好な関係を維持しようと絶えず腐心していたこと、そしてアーリーン・B・ローチハイムがそうした関係の輪を広げるとともに強固なものにして夫の成功に繋げようと、大いに貢献したことを論証している。サーリネンは、これらのクライアントは「新しい種類の文明」の表現者ないし解釈者であり、建築家はそうした文明の潮流やニーズを体現する術を知っていなければならぬと考えていた。サーリネンがそうした潮流、ニーズの極めて傑出した解釈者であったからこそ、ライバルがごく少なかつたのだし、バンハムが彼に付与した「『スタイル・フォー・ザ・ジョブ』派の最も重要な守護聖人」という地位は、真に、彼に相応しいものだったのである。

フィレンツェの捨子養育院博物館に思うこと

小巻哲 [CBJ編集部]

参照 | 『CASABELLA』865号、pp.4-25

前号で紹介したフィレンツェの捨子養育院博物館は、ブルネッレスキによるルネサンス建築の至宝を修復し改築するという難題を見事に解いた作品である。そのイボストウディオの仕事の概要はマルコ・ムラツツァーニとアドルフォ・ナタリーニによって明快に述べられており、ここで繰り返す必要はなかろう。ただし私には、彼らの論考を読み美しい写真を眺めるうちに、ふと思いついた2つの事柄がある。それを以下に述べてみたい。

—

この養育院が生み出された社会的な意義を、私たちは高邁なルネサンス精神の発現だと単純に思い込んでしまっていたような気がする。それは戦前から戦後にかけての歴史学者にして左翼的論者の羽仁五郎にしても同様に感じた(『ミケランジェロ』、岩波新書、1939)。しかしビルディング・タイプを時代に即して考えると、美談だけでは終わらなくなってしまう。冷淡な言い方だが、要するに需要と供給の関係である。捨子を保護し養育する施設を建てるということは、それだけ捨てられた子供が多かったのだろうと推測される。さらに思ったのは、施設全体は中庭を巡る閉じられた構成なのに、なゼロッジアが広場側に開かれたのかということだ。それらの点について考えてみた。

とは言うものの、手持ちの(乏しい)建築系文献には参考となる手がかりは見つからなかった(例えばジョルジョ・ヴァザーリ『ルネサンス彫刻家建築家列伝』でも重要視されていない)。ここに述べる多くの歴史的事象は、ヨーロッパ中世史の研究者である池上俊一氏の『イタリア・ルネサンス再考』に依拠している。

—

できるだけ多くの子供たちに開まれて生活することは、当時のフィレンツェ人の理想だったようだ。複数の実子のみならず養子／里子——縁故関係のない孤児や捨子を含む——を乳母を雇ってまで迎え、子供に溢れた家庭を構築し「家族」関係を強めていく。それほどまでに子供を愛するフィレンツェの街なのに、なぜ多くの子供が遺棄されたのだろうか。池上氏の論考を下敷きにして述べてみたい。大きくは、親の貧困や健康上の理由——
コムニネ
自治都市の経済的発展は貧富の差も生み出した——

が挙げられる。さらには時代的な要因もあったと言われている。上層市民の家庭には家事や子守を担う女性の召使いや奴隸がいた。その特に売買されたモノとしての女奴隸——奴隸貿易は認められていた——に、主人が手を付けて生ませた子供たちがいた。教会や修道院の増加に伴って増えた聖職者・修道士・修道女たちが生ませた/生んだ子供たちもいた。その多くが遺棄されたと言われている。周辺の農村部から連れてこられるケースもあったようだ。人数は明らかではないが、保護施設は飽和状態だったらしい。

1419年にブルネッレスキに委嘱されて1445年に開所したインノチェンティ捨子養育院は、フィレンツェで初めての(あるいはヨーロッパ最古とも言われる)——捨子や病人などの困窮者を救済する施設は13世紀に遡る——専門施設である。絹織物組合による管理・運営で、彼らの目的には組合のイメージアップが含まれると推測されようとも、この建物は自治都市フィレンツェの誇りとなった。なにしろ愛する子供たちの命が助かり、「家族」という重要な理念の崩壊を免れたのだから。さらには揺らぎを包含していた旧来のキリスト教信仰にも、十全に沿うものであっただろうと思われる。

余談ではあるが、ブルネッレスキ自身——独身を通した——も7歳の孤児を養子に迎えている(1417年または19年)。その孤児は後にブルネッレスキの弟子となり、いくつかの仕事に関与することになる。

—

さて次に、サンティッシマ・アンヌンツィアータ広場を縁取る

ロッジアについて考えてみたい。一般的には、都市計画家でもあるブルネッレスキが、広場全体を連続した統一空間として構想したと捉えられている。確かに広場の正面に位置する教会と養育院の対面にも、ロッジアが設けられている。しかし、これらの建物は養育院が建てられた後に建設/改築されたものなのだ。つまり養育院の完成時には、ロッジアは単独で都市に対峙していたことになる。そうなると「一体空間」というコンセプトだけでは弱くないか。結果的に広場はロッジアで囲われたのだ。これも池上氏を引くと、「建物に都市貴族の館のようなロッジアが敷設されていることは、捨子養育院の職員と子供たちが、氏族・拡大家族に擬されていた象徴である」。養育院を「家族の邸宅」として捉え、当然のこととして都市に向かってロッジアで開いたと解釈できる。つまりフィレンツェ市民の家族観および都市観もまた、大きな動機としてあったようだ。それをブルネッレスキが天才的に表現した建物だと言えるのではないか。

前段で述べたように、養育院が必要とされた状況は誉められたものではないが、遺棄された孤児を家族として都市に組み込んでいくというコンセプトには惹かれるものがある。いずれにせよルネサンス期のフィレンツェにおいては、家族と都市がキーワードだったことが見てくる。そこに古代ローマ建築の語彙が新しい表現として持ち込まれたのが、このインノチェンティ捨子養育院だという解釈を私はしている。

男女に分かれた大小の中庭の意味や当時のフィレンツェという都市の属性(都市におけるジェンダー)、さらにはユ

マニズムとキリスト教の相克など、さらに考えたい点は残るもの、今回は紙幅および時間が尽きました。

—

この養育院ひとつを考えてみても、私たち日本人が西欧人ほどルネサンスを身近に理解できていないことは明らかだ。彼らにとっての常識も、私たちには未知の領域だつたりする。そこでは、以上のような読み取りをしてみるのも有効ではないかと思っている。空間構成や様式・形式の理解に加えて、建築系の書物に載っていないような事象から建築を考えることは、決して無駄にはならないだろうと確信している。視野を広げること。それは遠い古典建築に限らず、やや近い近代建築・現代建築においても同様だと思われる。そうした角度を違えた視点からの建築読解を、今後のCBJレビューで——月評あるいは解題といったスタイルで——試みていきたいと思っている。反論・異論、大歓迎である。

【参考文献】

池上俊一『イタリア・ルネサンス再考——花の都とアルベルティ』、講談社学術文庫、2007年。ルネサンスを端的にセレブレイトする文献の多いなかで、私が偶然に出会った興味深い著作である。ぜひ参考されたい。

【写真】

スタジオ・コマキ



Fig.1: フィレンツェ遠望



Fig.2: サンティッシマ・アンヌンツィアータ広場 | 右に捨子養育院、左に教会を見る